

おてら

常例十六日講
毎月十六日午後一時より
お経練習・法話会

写経会

毎月第二・四金曜日
午後一時より

先祖への供養は

私への供養

九月二十日〜二十六日

二十日(土)

午後七時より

永代経法要

二十三日(火・祝)

午前十一時より

彼岸中日法要

ご本尊様にお参りしてから

お墓参りをしましょう

死に思う

位職 蒲原 霊英

三月三日に祖父 蒲原宏が遷化致しました。満一〇一歳の大往生でした。生前お世話になった方々には、厚く御礼申し上げます。

実のところ、薄情なのかと思うほど、私には哀しいとか寂しいとかの思いがありません。祖父は最期までやりたいようにやって、最後の句集も刊行できました。まだやらなければならぬことがあると言っていました。それもどうしてもやらないと他人に迷惑をかけるような類いのものでもありませんでした。祖父は不満があったようですが、私は自分ができることはやりましたし、死後の片付けや手続等も全てやりました。このように、両者全く後悔が無いとは言えませんが、やり切った感があるからです。

しかし、自分の子供の死を前にして、おそらく私はこれと同じことは言えないでしょう。子供はまだまだやりたいことが山ほど有りますし、私も後悔することばかりです。何故この子が死ななければならぬのかとか、やり場の無い怒りとか、言葉にできない様々な感情が私の心に渦巻くのは想像に難くありません。常日頃、この世は無常であり、老若男女、娑婆での縁が尽きれば死に、今度は浄土に生まれる縁をいただくのだということ、を説き、自分でも重々承知しているはずなのに、勝手なものです。また、頭では分かっているけれども心はそれを受け容れられない、人間は実に繊細な生き物ですが、言い方を換えれば、やはり愚かな生き物なのです。

でも、お念仏を「抛」に生かさせていただいていると、日にち葉ではあります。どんなに哀しい縁でも、いずれありがたい仏縁としていただくことが出来るでしょう。目を逸らさずに向き合う中で、例えば、この子が私を親にさせてくれたということから始まり、生きていけばやっていたであろうこと等、子供の過去現在未来とも向き合うでしょう。そして、それは同時に私自身の過去現在未来と向き合うことでもあり、生き様死に様を問われるでしょう。今まで自分の生き様死に様を考えることもなかった私に、この子が身を以て考える縁を与えてくれたのです。廻ればそのために阿彌陀様が仏の子として私の下に授けてくださった。そして今は仏様として阿彌陀様と一緒に絶えず私に喚びかけてくださっているのだといただく。何とありがたいことか。感謝のお念仏を申す身に成らせていただいたのです。と、自由気ままな息子と反抗期の娘の姿を見てイライラしながらも、仏の子を育てさせていただいているのだと自分に言い聞かせています。合掌

新盆供養法要



八月二日夜七時から、護持会主催の新盆供養法要が営まれました。県内外からたくさんのご門徒の方々が参拝され、各々在りし日の故人を偲びつつ、皆でお念仏を称えました。読経中にご法名が読み上げられると、参拝者が順次焼香。住職による法話の後、記念品とお供物の下付がありました。

ある日突然亡くなられた方、もちろんお一人お一人亡くなり方は違いますが、今は皆等しくお浄土で仏様と成られています。他宗では、亡くなった方はお盆に還って来られるからと、なすやキュウリで馬や牛を作ってお供えしたり、迎え火や送り火をしたりしますが、浄土真宗では、仏様に成られて、お盆だけではなく、いつも私たちの所に還って来て見護っていただくのだと考えます。

残念ながら、生前と同じような姿形で、目の前に現れて声を掛けてくださるわけではないのですが、私たちが見えない聞こえないだけで、いつもお側で声掛けをしてくださっているのです。だから、私たちは毎日のように、何気ない瞬間に故人のことを思い出していませんか？その中には必ず何かしら故人が遺してくださった教えが含まれていて、これらはもう立派な仏様のみ教えなのです。

大切な方の新盆にあたって、改めて遺して下さったみ教えをじっくりと味わわせていただきます。

『教行信証』が生まれるまで 4

本願寺第三代覚如上人によってまとめられた『御伝鈔』によると、親鸞聖人は、治承五年（一一八二）九歳の春に出家されたとなつていいます。聖人は、出家にあたって伯父の日野範綱に付き添われ、後に天台座主となる慈円の下に行かれました。この時から聖人は天台僧となれましたが、聖人はなぜ天台宗で出家されたのでしょうか。聖人の出自である日野家は藤原氏を起源としますが、政治上では主導的立場に在ったわけではありませんでした。日野家の人々を見ていくと、平安時代中期以降の多くの人が、「大学頭」や「文章博士」という地位に就いて居たことが分かります。

文章博士とは、国家によって創設された大学寮という教育機関の筆頭教官で、漢文学や中国史について研究・教授することを主な職務としていました。文章博士に就くことになっていた家は、平安時代中期以前では菅原氏や大江氏に限られていましたが、中期以降になると日野家なども加わった五家によって占められるようになります。このように日野家は国家の学問の家となつていったのでした。さらに日野家の人々は、『後撰和歌集』や『後拾遺和歌集』などの勅撰和歌集に和歌が収められていますので、歌人としても名が知られた家だったようです。

そして、聖人が入門された天台宗比叡山は、延暦二十三年（八〇四）に遣唐使船に乗って唐に渡り天台宗で仏教を学んだ最澄によつて開かれましたが、以後比叡山は、天台宗に限らず幅広い經典を集めて仏教全般を研究する「仏教の総合学問所」的な性格に発展していきました。

このように、代々学問に携わる日野家を出自とする聖人は、仏教經典を研究できる比叡山でその才能を生かすことができると考えられたのでしよう。

こうしてまだ数えで九歳という幼少の聖人は、慈円の下で出家して天台僧となられたのでした。

（本願寺新報より一部修正転載）